

FD

2015 Mutual Faculty Development



2015 京都大学のFD

— 京都大学の教育を、語り合う —



目次

- 1 ごあいさつ
- 2 全学教育シンポジウム「京大流・未来を拓く人の育て方」
- 5 大規模オープンオンライン講義（MOOC）
- 8 国際シンポジウム「MOOCは大学教育をどのように進化させるのか」
- 10 オープンコースウェア（OCW）
- 12 プレFDの取り組み
- 17 新任教員教育セミナー
- 19 教育制度改革に関する勉強会

京都大学のFD

FD研究検討委員会委員長 飯吉 透



本FD研究検討委員会は、2006年に研究科長部会の下に特別委員会として設置され、高等教育研究開発推進センターの協力を得て京都大学のFDを企画・実施してきました。本報告書は、その一端を学内の皆さまにご紹介するために、毎年作成されているものです。

大学設置基準の改正によってFDが義務化されてから、今年で10年目となりました。本報告書の中でも取り上げられているように、本学においても、本委員会や全学・各部局の努力によってFDに関する様々な取り組みが継続的におこなわれており、FDは制度的には一定の普及と定着が図られてきたと言えます。

ご存じのように、本学の全学的なFDの代表的な取組としては、「全学教育シンポジウム」、「新任教員教育セミナー」、「大学院生のための教育実践講座（プレFD）」等が挙げられます。次章でも報告されているように、2015年度の全学教育シンポジウムは、本FD研究検討委員会の企画によって「京大流・未来を拓く人の育て方」というテーマで開催されました。大学改革や教育制度改革が進められる中、「数値目標による教育改善・教育改革の達成度評価や各種の新たな制度の導入によって、次第に京大らしさが失われていくような気がする」という声を学内でよく耳にしますが、本来、教育改善や教育制度改革は、その大学の強みや個性を活かしつつ、学生にとってより効果的な教育をおこなうためになされるべきものです。その意味で、「京大流の人の育て方」や「各学部の特徴ある教育」を前面に押し出した今回のシンポジウムは、各学部における意欲溢れるユニークな教育的試みを相互に学び合うことを通じ、本学において主体的・能動的な教育改善・教育改革を推進していくための機運を高める良い機会であり、当日の会場では、クリッカーを用いて全参加者の意見を反映させながら白熱したディスカッションが展開されました。また、「新任教員教育セミナー」や「大学院生のための教育実践講座（プレFD）」でも、本学の先駆的・効果的な教育実践や取組の事例や教育リソース等が紹介され、テーマ別の分科会や全体会では、参加者間で活発な意見や議論が取り交わされました。

さらに、本学の教育における重点的取組課題の一つである「ICTを活用した教育の推進」についても、本年度は、

総長による「Evolution of the Human Sociality: A Quest for the Origin of Our Social Behavior（人類進化論）」を始め、学部・大学院レベルを合わせて計7つのMOOC（大規模オープンオンライン講義）が京都大学から世界に向けて開講されるなど、大きな進展がありました。これは日本の大学としてトップクラスの成果ですが、これまで本学が10年来精力的に取り組んできたOCW（オープンコースウェア）に加え、今後このような新しい技術や教育方法をどのように効果的に活かし、京都大学の教育のさらなる質的・量的な充実や国際化を図っていきけるかは、FDの観点からも重要な課題と言えます。本年度、このような取組の全学・各部局における展開を促すために、高等教育研究開発推進センターにおいて「教育コンテンツ活用推進委員会」が新たに立ち上げられましたが、今後、本学の教育の一層の進展を図るために、本FD研究検討委員会としても同委員会との互恵的・相乗的な連携が期待されます。

次年度から始まる国立大学法人の第3期中期目標・中期計画において本学は、「学生本位の視点に立った教育を行うため、教育活動に係る検証を行い、学生のニーズ、学術の発展動向等に応じた、学生にとって効果的な教育改善を行う」という中期目標を掲げており、「全学的なファカルティ・ディベロップメント（FD）」について企画・実施するとともに、FD勉強会を通じて部局のFD活動を支援し、専任教員の75%以上の受講を目指す」という中期計画を策定しています。この「75%以上の受講」を表層的・形骸的なものに終わらせないためにも、FD活動をより広義に「授業改善を越えた教育改善・教育制度改革全般に資するもの」と捉え、各部局や各教員のニーズ・関心に応じた勉強会やワークショップ等を通じて、本学の教育を「学生本位の視点」からも実態的・実質的により優れたものにするために切磋琢磨していくことが肝要です。本報告書には、そのような事例も紹介されておりますので、是非お目通しいただくとともに、今後の勉強会・ワークショップや新たな活動企画についても幅広くご提案等いただければ幸いです。

最後となりましたが、今後とも本委員会の活動のさらなる充実を図ってまいりますので、各部局の教職員の皆さまには、より一層のご協力をよろしくお願い申し上げます。

全学教育シンポジウム

「京大流・未来を拓く人の育て方」

本シンポジウムは1996年から年1回開催されており、京都大学の教職員が全学的な教育のあり方や、教育の改善・充実の方向性について議論し、部局の枠を越えた教職員の交流をはかる場となっています。

近年は教育担当理事が主催し、今年度からFD研究検討委員会の企画により、国際高等教育院企画調整掛、教育推進・学生支援部教務企画課教育企画掛の協力の下、高等教育研究開発推進センターが実施・運営に携わっています。今年度は、「京大流・未来を拓く人の育て方」をテーマにして、9月2日に桂キャンパスで開催されました。参加者は273名でした。

プログラム

- | | |
|-------------|---|
| 10:00～ | 開会挨拶 ：北野 正雄 理事（教育・情報・評価担当） |
| 10:05～ | 基調講演 ：山極 壽一 総長「大学が直面する課題と京都大学が目指す教育」 |
| 10:40～ | 報告 ：FD研究検討委員会・高等教育研究開発推進センター「10学部11学科の特色ある教育の報告」（10学部11学科の映像と質疑応答） |
| 12:00～13:30 | 昼食・休憩 |
| 13:30～ | 講演 ：北野 正雄 理事「京都大学の教育改革とそれを取り巻く状況」 |
| 14:00～ | 報告
①「京都大学における高大接続・高大連携の取組みについて」 森脇 淳 理学研究科長
②「入学者選抜と特色入試」 木南 敦 教育担当理事補 法学研究科教授
③「平成28年度からの教養・共通教育」 喜多 一 国際高等教育院副教育院長 |
| 15:00～ | 休憩 |
| 15:20～ | パネルディスカッション「京大流・未来を拓く人の育て方」
コーディネーター：飯吉 透 教育担当理事補 高等教育研究開発推進センター長
パネリスト：山極総長、北野理事、森脇研究科長、木南理事補、喜多副教育院長、
柴 浩司 大阪府立大手前高等学校長、仲 暁子 ウォンテッドリー株式会社代表取締役CEO |
| 16:50～ | 閉会挨拶 ：飯吉 透 教育担当理事補 高等教育研究開発推進センター長 |



今回のプログラムのなかでとくにユニークといえるのは、映像による「10 学部の特徴ある教育の報告」です。全学教育シンポジウムの議論はこれまで教養・共通教育が中心でしたが、今年度からは、学部・大学院を含めた全学的な視点から京都大学の教育のあり方を考えることをめざしています。そこでまず、部局自治の下で互に見えにくくなっている各学部の教育の特徴を、その学部らしい特色ある教育的取組に焦点をあてて見ていこうというのが、この報告の趣旨でした。報告は、まず10学部11学科(医学部のみ、医学科と人間健康科学科の2学科に分けて作成)の特色ある教育的取組を紹介する映像を流し、それについて各学部から補足コメントをする、という形で行われました。そのなかで紹介された、各学部の特色ある教育的取組は次のとおりです。

総合人間学部



コメンテーター：石川 尚人 教授

- ①副専攻の必修化
- ②クラス担任制と教員アドバイザー制
- ③自学自習のサポート

文学部



コメンテーター：川添 信介 教授(研究科長)

- ①少人数教育
- ②学生支援(国際化、先輩・学生相談室)

教育学部



コメンテーター：子安 増生 教授(研究科長)

- ①「理論」と「実践」の往還
- ②「対話型」教育
- ③「文理融合の視点」を重視した教育

法学部



コメンテーター：堀江 慎司 教授

- ①法学部基礎演習
- ②段階的・体系的・集中的学習

経済学部



コメンテーター：松井 啓之 教授

- ①入門演習
- ②国際化に向けたカリキュラムの改編

理学部



コメンテーター：鈴木 あるの 講師

- ① ゆるやかな専門化
- ② 学生支援
- ③ 国際化への対応

医学部医学科



コメンテーター：岩井 一宏 教授(副研究科長)

- ① モジュール制
- ② マイコース・プログラム
- ③ 京都大学の教育への提言

医学部人間健康学科



コメンテーター：黒木 裕士 教授

- ① 早期体験型学習 (アーリー・エクスポージャー)
- ② 実践型学習

薬学部



コメンテーター：加藤 博章 教授(副研究科長)

- ① 医薬品開発プロジェクト教育
- ② Small Group Discussion (SGD 演習)
- ③ 薬学専門実習

工学部



コメンテーター：伊藤 紳三郎 教授(研究科長)

- ① エビデンスに基づく学習支援
- ② ポートフォリオによる個別指導
- ③ 国際化への対応

農学部



コメンテーター：宮川 恒 教授(研究科長)

- ① 実習科目の重視
- ② 国際化への対応
- ③ 高大接続

全学教育シンポジウムの事後アンケートでは、回答者118名中75名が「10学部の特徴ある教育の報告」を「良かったプログラム」と評価しました。映像によって各学部の教育の特徴を概観するというのが新鮮だったという感想を数多くいただきました。今回作成された映像については、各学部の教育の紹介などに活用されることが検討されています。

大規模オープンオンライン講義(MOOC)

① 京都大学におけるMOOC

京都大学は、MOOC (Massive Open Online Courses: 大規模オープンオンライン講義) プラットフォームのedX (エデックス) を通じ、全世界に向けて英語による講義を配信しています (<https://www.edx.org/>)。MOOCは、オンラインで講義を配信するだけでなく、修了条件を満たした受講者には修了証を発行できる点が特徴であり、高等教育の新しい講義提供方法として世界的に注目を集めています。edXは、ハーバード大学とMITが中心となって設立された、世界トップクラスの大学や教育機関で構成されるMOOCの大学コンソーシアムです。京都大学は、世界トップレベル44校から成るチャーター校として日本で初めて参加し、「KyotoUx」という名称で講義を配信しています(図1)。2015年度は7科目を開講します(表1)。



【図1】edXのサイト(KyotoUxからの提供講義)

【表1】2015年度開講科目

開講時期	講義名	講義担当者	配信期間	備考
2015年4月	The Chemistry of Life (生命の化学)	上杉 志成 教授 (物質-細胞統合システム拠点/化学研究所)	15週	2年目
2015年10月	Evolution of the Human Sociality: A Quest for the Origin of Our Social Behavior (人類進化論)	山極 壽一 総長	6週	-
2015年11月	Extremes of Life: Microbes and Their Diversity	跡見 晴幸 教授 (工学研究科 合成・生物化学専攻)	4週	SGU*
2016年1月	Fun with Prime Numbers: The Mysterious World of Mathematics	伊藤 哲史 准教授 (理学研究科 数学教室)	4週	SGU*
2016年1月	Culture of Services: New Perspective on Customer Relations	山内 裕 准教授 (経営管理大学院)	8週	-
2016年2月	Introduction to Statistical Methods for Gene Mapping	山田 亮 教授 (医学研究科附属ゲノム医学センター)	4週	SGU*
2016年3月	Ethics in Life Sciences and Healthcare: Exploring Bioethics through Manga	児玉 聡 准教授 (文学研究科 倫理学専修)	5週	SGU*

*SGUとはスーパーグローバル大学創成事業の通称です。これらの講義はSGUの助成を受けて、開講されています。

② 山極総長によるMOOC配信

KyotoUxからの2つめの講義として、山極壽一総長による「Evolution of the Human Sociality (人類進化論)」が、10月29日(木)より6週間配信されました。edXを含め主要なグローバルMOOCプラットフォームから、総合研究大学の学長自ら講義を提供するのは世界でも初めてのことです。この講義には世界126の国と地域から多数の受講者が登録し、成功裏に終了しました。

本講義終了の前日には、芝蘭会館山内ホールにおいて、講義連動型のライブ講義イベントを開催し、その様子はUstreamで世界の受講者に向けて配信されました(図2)。このイベントでは、講義で課された課題をもとに、コンペティションを勝ち抜いた4名の受講者がビデオ会議システムを通じてプレゼンテーションをおこないました。山極総長をはじめとする5名の審査員に選ばれた最優秀者2名は、1月に京都大学に無料招待され、山極総長や、霊長類学の教員や学生と交流する機会を持ちました。



【図2】コンペティションの様子と審査結果発表

③ MOOCの制作・運用について

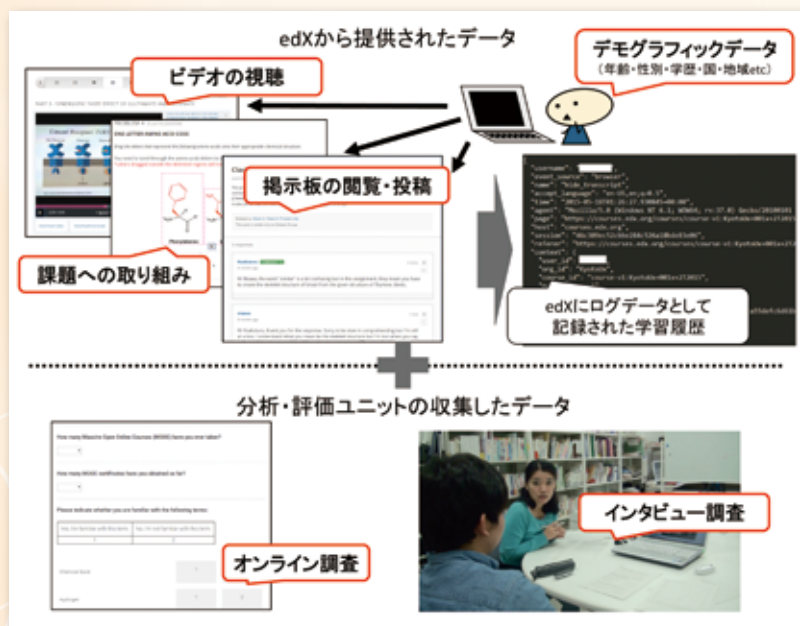
MOOC配信決定後、高等教育研究開発推進センターの支援のもと、講義の魅力を伝えるインパクトのある2~3分の紹介ビデオ、講義資料、講義素材の収集や作成が行われます。講義ビデオの撮影・編集は専門スタッフが担当し、技術的側面からサポートしています。また、講義で課す課題の作成や講義内容の英語化についても専門スタッフがサポートします(図3)。こうして、様々な講義スタイルに合わせた高品質のビデオが作成されています。



【図3】専門スタッフによるMOOCの制作支援

④ 受講者・講義の分析と評価

高等教育研究開発推進センターではまた、MOOCの講義に関わる様々なデータを収集し、受講者の学びや講義の活用に関する研究も行われています(図4)。同センターではさらに、講義の提供を開始した週と最終週にオンライン調査を行い、受講者の受講動機や既有知識、講義の満足度などの把握にも努めています。2015年度は、京都大学でMOOCを受講していた学部学生を対象にインタビュー調査も行いました。これらのデータを用いて、学習者がMOOCの講義をどのように活用しているのか、どのような講義が受講者の学びに繋がるのかといった観点から分析・評価を進めています。



【図4】2015年度のMOOCの受講者・講義のデータの収集状況

⑤ MOOCを使った教育展開

作成したMOOCは様々な教育展開が可能です。たとえば、学内向け講義の準備教材や補足教材としての活用や、海外の大学への教材提供にも利用可能です。また、幅広い受験生確保のためのアウトリーチ教材としても活用できます。

2014年度、2015年度にThe Chemistry of Lifeを配信した上杉志成教授は、同時期に京都大学で開講した「生命の有機化学」においてMOOCを用いた反転授業を行いました(図5)。上杉教授は、京都大学以外の、海外の大学においても同様に反転授業を実施しています。受講生が授業時間外にMOOCを通してあらかじめ講義を受けることで、グループワークや発表・討論に授業時間の多くを割くことができたこと、英語でオンライン配信されているMOOCを用いることで、国内外のどの大学においてもこうした反転授業を実施することができたことは講義配信の大きなメリットであったと上杉教授は語っています。

高等教育研究開発推進センターでは今後も、MOOCの更なる活用を目指し、幅広い教育展開について調査、研究が継続される予定です。



【図5】上杉志成教授の行った反転授業の枠組み

国際シンポジウム

「MOOCは大学教育をどのように進化させるのか」

12月9日14時45分より、京都大学芝蘭会館稲盛ホールにて、国際シンポジウム“How MOOC Evolves University Education”（「MOOCは大学教育をどのように進化させるのか」）を開催しました。このシンポジウムの直前、13時から14時30分までは山極総長が講師を務めるMOOC「Evolution of the Human Sociality」と連動した受講者参加型のイベントPresident's MOOC “Evolution of the Human Sociality” Live! が稲盛ホールの隣に位置する山内ホールにおいて開催され（「3. 大規模オープンオンライン講義」を参照）、それに引き続いての開催となりました。シンポジウムの参加者の多くは、総長MOOCイベントの開始時から参集し、シンポジウム会場内でUstream配信されたイベントの様子を観覧していました。

プログラム

14:45 **開会挨拶**：飯吉透（京都大学理事補・高等教育研究開発推進センター長）

14:50 **総長挨拶**：山極壽一（京都大学総長）

15:00 **基調講演**：キャシー・ピュー（Vice President of Education Services at edX）
「MOOCsの過去と未来：私たちは何を成し遂げ、何処へ向かうのか？」
“The Past and Future of MOOCs: What have we done and where are we going?”

パネルディスカッション モデレーター：飯吉透

15:40 趣旨説明：飯吉透

15:45 「KyotoUxの現状」
酒井博之（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

15:55 「“Introduction to Statistical Methods for Gene Mapping” について」
山田亮（京都大学医学研究科教授）

16:05 「“Fun with Prime Numbers: The Mysterious World of Mathematics” について」
伊藤哲史（京都大学理学研究科准教授）

16:20 「“Culture of Services: New Perspective to Customer Relations” について」
山内裕（京都大学経営管理大学院准教授）

16:35 「受講生アンケートと学習データの分析」
田口真奈（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

16:50 **ディスカッション**

17:25 **クロージング**

シンポジウムは、イベントを終えたばかりの山極総長による挨拶から始まりました。なぜMOOCを始めようと思ったのかという動機や、担当者としての経験が述べられるとともに、こうした取組が京都大学の教育の質の向上につながることへの期待が寄せられました。

次に、基調講演者として、edXの教育サービス部門のVice Presidentであるキャシー・ピュー（Kathy Pugh）氏を迎え、MOOCを巡る世界の最新の動向や試みについて講演が行われました。

パネルディスカッションは、京都大学においてMOOC制作に関わる5名の教員の話提供から始まりました。これらの話提供により、京都大学におけるMOOCの取組の概要、実践事例の紹介、データ分析の結果を踏まえた上で、フロアを交えて今後の展望と期待に関する意見交換が行われました。

参加者からのアンケート結果では、研究会の有意義度は5段階評価の4.41と非常に高く、今後もこうした研究会の開催を希望する声が寄せられました。



オープンコースウェア(OCW)

2005年から始まった京都大学OCWは、学内で実際に利用している講義教材をインターネットで公開するプロジェクトです。学内の学生、教職員、他大学の学生、関連学会の研究者、京都大学を志願する高校生、さらなる学習を志す社会人など、あらゆる方々に京都大学の講義内容を知ってもらい、門戸を広げることを目的としています。また文科省の大学教育の情報公開として、全部局のシラバスをOCWで公開しています。今後は、世界へ向けて京都大学のビジビリティを高めるとともに、日本の文化・伝統を発信する手段として日本語でも積極的にアピールします。OCWは、人類の知的資産に対する貢献とその共有を目指して、世界各国とのコミュニケーションを高め、国際交流を推進します。

これまで、OCWの運用等に関しては、情報環境機構のOCW運用委員会において検討されてきましたが、今年度から新たに高等教育研究開発推進センターに設置された教育コンテンツ活用推進委員会において、OCWの教育コンテンツの活用について議論していきます。また、学外との交流は、世界の300以上のOCWを推進している国際オープンコースウェアコンソーシアム、日本オープンコースウェアコンソーシアムに入会しており、国内外でOCWを推進している大学や企業との交流をはかっています。

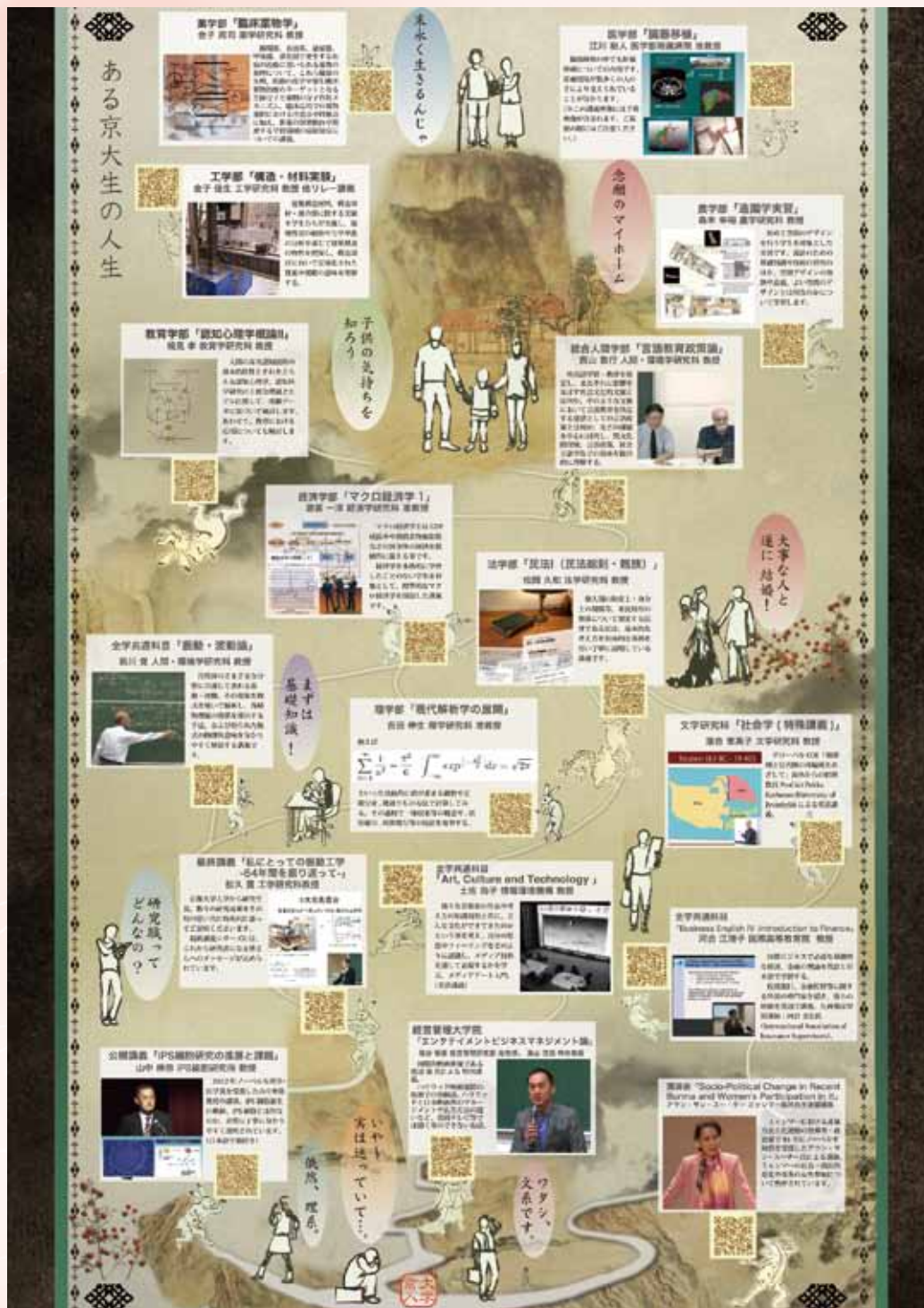
2015年度に公開している講義数は、645講義です。その内訳は、【通常講義】全308講義(日 273、英 30、仏 5)、【公開講座】全218講義(日 187、英 29、仏 2)、【国際会議】全58講義(日 5、英 41、仏 12)、【最終講義】全62講義(日 61、英 1)です。京都大学の50部局がOCWを公開しています。

2015年度の大きな取組の一つとして、高校生へのOCW配信があります。これまで、高校生へOCWの情報がなかなか届きにくかったことから、以下の対策を行いました。

- ①現役京大1回生による高校生へのおすすめOCWの紹介として、OCWウェブサイトのトップページで「高校生のためのOCW」を配信しました。
- ②現役京大1回生により「高校生のためのOCW」パンフレットを制作、OCWウェブサイトのトップページで公開し、リンクから実際の講義を閲覧することが可能です。



また、京大の学生にもっとOCWを使ってもらうために、「よりよい人生を歩むためにOCWを活用しよう」をテーマに、人生ゲームに見立てて以下のパンフレットを作成し、配布しました。

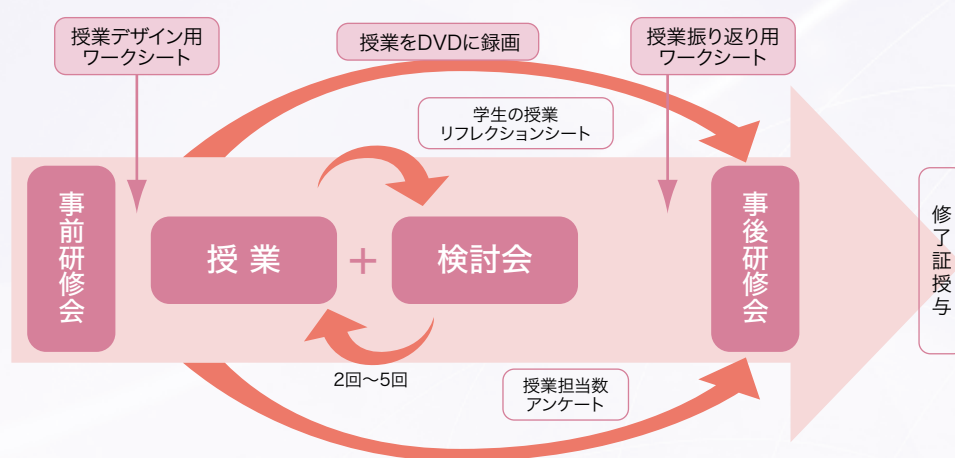


プレFDの取り組み

「プレFD」とは、これから大学教員になろうとする大学院生やオーバードクター（OD）・ポスドク（PD）のための職能開発活動の総称です。ここでは、今年度、本学において実施された3つのプレFDの取り組みについてご紹介いたします。

1. 文学研究科プレFDプロジェクト

2009年度より開始された文学研究科プレFDプロジェクトは、文学研究科とFD研究検討委員会が共同で主催する、文学研究科のODによるリレー講義形式のゼミナールです。本プロジェクトは、年度はじめの事前研修会、各ODを講師とする2～5回の公開授業、他の講師およびコーディネーターを交えた授業ごとの検討会、そして年度末の事後研修会により構成されます。所定の条件を満たした講師には、京都大学総長よりプロジェクトの修了証が授与されます。今年度は、文学研究科よりコーディネーター3名、教務補佐員2名、講師19名が参加し、高等教育研究開発推進センターより5名がこれをバックアップする形で、哲学基礎文化学系と基礎現代文化学系の2つのリレー講義が展開されました。



文学研究科プレFDプロジェクトの流れ

2015年度文学研究科プレFDプロジェクト実施体制

水谷 雅彦

文学研究科教授（統括コーディネーター）

出口 康夫

文学研究科教授（哲学基礎文化学系コーディネーター）

永井 和

文学研究科教授（基礎現代文化学系コーディネーター）

赤嶺 宏介

教務補佐員（哲学基礎文化学系）

安井 大輔

教務補佐員（基礎現代文化学系）

飯吉 透

FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長

松下 佳代

高等教育研究開発推進センター教授

田口 真奈

高等教育研究開発推進センター准教授

田中 一孝

高等教育研究開発推進センター特定助教

佐金 武

高等教育研究開発推進センター特定研究員

2015年度のプログラム

前期公開授業

哲学基礎文化学系ゼミナールⅠ

木曜2限／文学部総合研究2号館1階第10演習室

水野 友晴	西田幾多郎『善の研究』の新しさ：主体性の問題をめぐって
根無 一行	レヴィナス『全体性と無限』を読む
岩井 謙太郎	ルターの宗教改革の思想
飯塚 一	カント『純粋理性批判』入門
三木 那由他	意味を哲学する
渡部 和隆	キリスト教思想入門初歩ー近代日本から見たキリスト教ー コンセプトマップを利用した前期のまとめ

基礎現代文化学系ゼミナールⅠ

木曜5限／文学部第1講義室

森下 達	手塚治虫研究
パク・ミギョン	鬼表象における日韓視覚文化の比較研究
中山 俊	フランスにおける文化遺産の保護

後期公開授業

哲学基礎文化学系ゼミナールⅡ

木曜2限／文学部総合研究2号館1階第10演習室

藤田 俊輔	M・ブーバーの宗教哲学
福田 宗太郎	知識と理解：プラトンの知識論
安井 絢子	障害の個人モデルと社会モデル
越後 圭一	能動と受動：メーヌ・ド・ビランの人間学
川本 愛	幸福という概念について考える コンセプトマップを利用した後期のまとめ

基礎現代文化学系ゼミナールⅡ

木曜5限／文学部第1講義室

岡内 一樹	森林からみる現代社会の歴史
大西 勇喜謙	科学と社会
菅原 裕輝	脳神経科学の歴史と哲学
植田 尚樹	音韻論研究とモンゴル語
Ivan Diaz Sancho	現代演劇の革命ー寺山修司と天井棧敷



授業風景および授業後の検討会の様子

2015年度のプレFDを振り返って

統括コーディネーターから

昨年度に続き本年度も統括コーディネーターを務めさせていただいたが、今年もやはり、ほとんど何も貢献できることはなかった。というのも各系のコーディネーターの先生方や優秀な教務補佐員の皆さんに運営の実質をお任せしており、それで何の問題もなかった、というより極めて円滑な授業運営がなされていたからである。関係する方々に感謝したい。とりわけ教務補佐員の方々は、毎回の講義とその後のディスカッションに関する詳細な報告をメールでお届けいただき、今年もそれぞれの講義と議論の質の高さに毎回驚かされた。また本年度は、大学コンソーシアム京都においてプレFD修了者によるリレー講義「人文学入門（現代社会の諸問題に立ち向かうための哲学）」が開講され、幸いなことに好評であったと聞いている。それぞれの講義担当者は、おそらく相当時間をかけて講義準備をされたのであろうが、いずれの講義も専任の教員になった将来において毎回の授業にこれほどの質を保つだけの準備をする余裕があるのだろうかといういらぬ心配をいだかせるほどのものであった。プレFDという京大文学部独自の試みが開始されて7年になる。開始時に企画に手探りで参画した者としては、講義担当者が次々に自立した大学教員になっているという報を聞くにつけ感慨深いものがある。予算面を始めとして多くの問題が山積していることは事実であるが、各方面のご理解とご助力をお願いしたい。

(文学研究科教授・副研究科長 水谷雅彦)



各系のコーディネーターから

● 哲学基礎文化学系

2009年度の文学研究科プレFDの立ち上げに関わった私であるが、数年間のブランクを経て、今年度、再びコーディネーターを担当することになった。その久しぶりの現場では、いい意味で驚かされることが多かった。その意味で、まさに「浦島太郎」のような体験をすることになったのである。まずは、教務補佐員やセンターの研究員らプレFDを支える人たちの仕事振りが、もはや「ベテラン」の域に達していたのには驚いた。おかげで、コーディネーターとしては大いに助かった。また担当する講師の方々の教育技量の向上にも目を見張るものがあった。多くの講師が、「授業デザイン用ワークシート」等のFDツールを見事に使いこなし、積極的に双方向型の授業に取り組んでいた。プレFD初年度には、まだまだ、教壇で講義ノートを読み上げる、昔ながらの授業スタイルが散見されたものだが、今年度、私の見聞きした範囲では、そのような講義はほとんど姿を消したようである。それに応じて、出席している学生たちにも、積極的に発言する姿勢が定着してきているように思えた。プレFDは7年間で確実に進化し深化している。それが、「浦島太郎」の感想である。

(文学研究科教授 出口康夫)



● 基礎現代文化学系

私は、プレFDのプログラムが発足した2009年度から、ほぼ毎年コーディネーターとしてつきあってきた。今年で丸7年がすぎた勘定となる。この3月に定年退職をむかえるので、プレFDとのつきあいも今年度が最後になる。発足した当初のことを思うと、なかなか感慨深いものがある。

今年度は前期と後期をあわせて10人の講師が授業を担当した。そのうち3人はプレFDに初参加であり、総長の修了証をいただくべく、事後研修までの全プログラムに参加する。残り7人は、すべてプレFDは経験済みであるが、基礎現代文化学系の慣例では、すでに総長の修了証を獲得していても、3年間は事後研修を除くプログラムに参加することになっているので、ほとんどの授業で毎回授業後の検討会は開いた。

初参加の3人のうち2人は、言語学と美学・美術史が専門で、現代文化学専攻の出身者ではない。それぞれの系のプログラムでは人員超過となったが、是非プレFDに参加したいとの強い希望だったので、講師の枠に余裕のあった基礎現代文化学系の授業を担当してもらうことにした。専門がちがうので、どうなることか、コーディネーターとしては心配ではあったが、案ずるより産むが易しで、2人とも素晴らしい授業をやってくれた。

また今年は、3回の授業すべてをグループディスカッションとする、アクティブラーニング型の新機軸が登場した。事後検討会では賛否両論、いろいろ意見が出たが、あらためて京大生の適応能力の高さを実感できる授業でもあった。

(文学研究科教授 永井和)



2. 大学コンソーシアム京都との連携による単位互換リレー講義

文学研究科プレFDプロジェクト修了後の発展的プログラムとして、今年度より新たに、大学コンソーシアム京都との連携のもと、単位互換リレー講義「人文学入門」が開始されました。2015年度は、「感性の言語化」、「人間の社会性」、「他者の問題」、「人生の意味」といったテーマに関して、コーディネーター1名と講師4名が哲学系の授業を展開し、受講者から多くの肯定的評価を得ました。来る2016年度は、日本を含むアジア全体の近・現代的問題について多角的に授業を展開する予定であり、目下、コーディネーター1名と講師7名が一丸となってその準備を進めています。本プログラムでは、プレFD修了生が協力し合い、個々の担当授業だけでなく、半期15回の講義全体をデザインするという経験を積むことに主眼がおかれています。また、受講生が所属する大学も様々であり、こうした多様な学生に対応するため、若手講師がそれぞれ創意工夫を凝らし、アクティブラーニングを取り入れた新たな授業形式にも積極的に挑戦しています。

2015年度のプログラム

コース・コーディネーター	児玉 聡 (文学研究科准教授)
第1部「感性を言語化する」	田中 一孝 (高等教育研究開発推進センター特定助教)
第2部「社会性を理解する」	佐金 武 (高等教育研究開発推進センター特定研究員)
第3部「他者を視野に入れる」	呉羽 真 (宇宙総合学研究ユニット特定研究員)
第4部「人生の意味を考える」	君嶋 泰明 (京都産業大学 全学共通教育センター 非常勤講師)



課題作業やディスカッションを取り入れた授業の様子

2015年度コース・コーディネーターから

本講義は、プレFDを修了した文学研究科のポスドクによるリレー講義であり、文学部が初めてコンソーシアム京都で提供するものと聞いている。タイトルは「人文学入門」とし、今年度は思想文化学系の5人の講師により、「現代社会の諸問題に立ち向かうための哲学」という副題を付けて、後期に京都駅前のキャンパスプラザ京都にて実施した。プレFDと一番異なると思われる点は、受講する学生の多様さである。哲学に興味はあるものの、これまで哲学に全く触れたことがなかった学生も含めて、いろいろな大学のさまざまな学力の学生が集まった教室で教えることは、プレFDを修了した者にとっても新鮮な体験であり、また大きな挑戦となったと思われる。この経験は、どのような大学・学部就職しても対応可能な教育スキルを付けるのに資するであろうし、哲学カフェのようなアウトリーチ活動をする際にも活かされたいと思われる。講師たちの熱心で親身な教育姿勢も手伝い、最後まで多くの受講生が残り、学生同士で活発な議論が繰り広げられたことは特記されてよい。なお、この講義は、来年度も内容を変えて継続する予定である。



(文学研究科准教授 児玉聡)

3. 大学院生のための教育実践講座

大学院生のための教育実践講座は、京都大学FD研究検討委員会が主催となり、将来、大学教育に携わりたいことを希望する本学の大学院生（PD・研修員などを含む）のために、ファカルティ（大学教員）へと自己形成していくきっかけとなる場を提供するプログラムです。今年度は、8月4日午前10時から午後6時半まで、京都大学百周年時計台記念館2階で開催されました。昨年度はBasicとAdvancedの2コース制でしたが、後者が研究科横断型教育プログラム「大学で教えるということ」に統合されたことにより、今年度は1コース制での実施となりました。研修会直後にアンケートを実施し、回答数42件についてコースに対する満足度を5件法（1: まったく満足していない～5: 非常に満足している）で評価したところ、全体平均4.47点（グループ討論4.43点、ミニ講義4.43点、コミュニケーションデザイン4.42点）となり、この取り組みに対する高い満足度がうかがえます。

2015年度のプログラム

10:00～ 開会式

挨拶：飯吉 透 教授（FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長・教育担当理事補）
趣旨とプログラムの説明：田中 一孝 高等教育研究開発推進センター 特定助教

10:20～ ミニ講義1「大学授業の現在と未来」：飯吉 透 高等教育研究開発推進センター 教授

10:45～ グループ討論1「大学の授業をどう思うか」（自己紹介）

11:45～ ランチと自由討論

13:00～ コミュニケーションデザイン「演劇でコミュニケーションデザイン」：
運 行 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 特任講師

14:20～ ミニ講義2「大学授業の現場から見たプレFD2015」：吉沢 一也 大阪体育大学 講師

14:55～ グループ討論2「大学の授業で教師に求められるもの」

15:55～ グループ討論整理

16:30～ 全体討論：「大学で教えるために」

17:30～ ミニ講義3「大学で教えるということ」：田口 真奈 高等教育研究開発推進センター 准教授

17:55～ 閉会式

修了証授与：飯吉 透 教授
閉会式終了後 情報交換会（18時30分まで）



新任教員教育セミナー

京都大学高等教育研究開発推進センターでは、平成22年度より教育推進・学生支援部教務企画課の支援のもと、本学に新たに採用された新任教員を対象とした新任教員教育セミナーを実施しています。本年度はその6回目にあたります。「京都大学らしい教育とはどのような教育か」を考え、「学内にはどのような教育サポートリソースがあるのか」「大学・部局や教員はどのような教育課題を抱え、それにどのように取り組んでいるのか」を知ってもらうための機会となっています。

本セミナーは、前期の教育経験をふまえてそのふり返りの機会となることもめざして、例年、9月に実施しています。本年度は、9月25日に百周年時計台記念館国際交流ホールにて行いました。プログラムは、表1の通りです。全学、部局、個々の教員という異なるレベルでの教育的取組を、ミニ講義や討論などを通じて理解してもらうことを意図して設計されています。

【表1】2015年度 京都大学新任教員教育セミナー・プログラム

12:45～	受付	
13:00～	開会式 司会：高等教育研究開発推進センター准教授 田口 真奈 挨拶：FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長・教育担当理事補 飯吉 透	
13:05～	セッション1 ミニ講義1：「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革」 教育担当理事 北野 正雄	
13:25～	セッション2 ミニ講義2：「京大の教育的取組」 ICTを使った教育—MOOCを中心に— 高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透 高校と大学のギャップを埋めるOCW プロジェクト 国際高等教育院副教育院長 三輪 哲二	
14:05～	セッション3 ミニ講義3：「京大生の学習のアセスメント」 高等教育研究開発推進センター准教授 山田 剛史	
14:20～	セッション4 ミニ講義4：「私の授業」 農学研究科教授 北島 薫	
14:50～	セッション5 情報提供：「京大の教育・学習支援」 高等教育研究開発推進センター教授 松下 佳代 図書館機構准教授 北村 由美 国際交流センター教授 河合 淳子	
15:05～	休憩	
15:20～	セッション6 グループ討論：「京大でどう教え、指導するか」	
16:50～	休憩	
17:05～	セッション7 ラップアップ	
17:35～	閉会式 挨拶：FD研究検討委員会委員長・高等教育研究開発推進センター長 飯吉 透	
閉会式終了後 情報交換会 (18:30まで)		

セッション1では、北野教育担当理事による、「現在の大学教育の動向と京都大学の教育改革の紹介」と題したミニ講義が行われました。セッション2では、「京大の教育的取組」として、まず、飯吉高等教育研究開発推進センター長より、ICTを使った教育について報告がありました。続いて、国際高等教育院において、様々な分野の教員がチームを組んでリメディアルのための教材開発をおこなった事例について、三輪副教育院長より紹介がありました。セッション3では、「京大生の学習のアセスメント」と題して、高等教育研究開発推進センター山田准教授より、京大生の学習の特徴に関するデータにもとづく説明があり、さまざまな評価手法についても紹介がありました。セッション4は、例年、参加者の評価が高い「私の授業」と題するもので、本学の教員より自身の授業実践についての具体的な紹介がありました。今年度は、農学研究科の北島教授より、自身の授業で実際に使用されているリフレクションペーパーなどの紹介もまじえ、具体的な工夫について解説が行われました。プログラムで最も長い時間をとっているのは、セッション6のグループ討論です。今年度は、表2のようなテーマを掲げ、学内の教員の協力を得ながら5つのグループ討論を行いました。閉会式終了後に開催された情報交換会では、部局を越えて教育・研究について熱心に語り合い、また談笑しあう姿がみられました。

【表2】セッション6 グループ討論「京大でどう教え、指導するか」各テーマと内容

テーマ	事例紹介・情報提供		センター担当
「英語による授業」を担当することになったら	国際高等教育院 副教育院長／教授 喜多 一	英語による授業を急に担当することになったとしたら困惑する教員も多いのではないだろうか。ここでは、そのような事態になった場合に、どのように考え、何から準備すればよいのかについて考える。	田口准教授 丁研究員
基礎概念の理解を確かなものにするには	工学研究科教授 琵琶 志朗	基礎的な内容を学生に理解させ、理解を定着させていくことは重要であるが、そのためには科目間のつながりを意識し、また学生の理解度を確認しながらすすめていく必要がある。ここでは、基礎概念の理解を確かなものにするための工夫について考える。	松下教授
困難を抱えた学生に向き合うには	健康科学センター助教 上床 輝久	修学上、研究指導上の不適応を起こした学生・院生に対し、教員はどう向き合えばよいのだろうか。また、対応が必要なのはどのような場合なのか。	溝上教授
研究室をどう運営するか	学際融合教育研究推進 センター准教授 宮野 公樹	教員にとっての研究推進の場、そして高度な人材育成の場である研究室。研究室を、研究と教育の原動力として機能させるには？	奥本准教授
博士課程院生のキャリア形成を支援するには	学生総合支援センター・ キャリアサポートルーム室長／教授 奥村 正悟	欧米と同様、わが国でも文系・理系を問わず、博士課程修了者が社会で広く活躍することが求められつつある。博士課程院生に対して、アカデミック・ポスト以外のキャリアも含む多様なキャリア形成を支援していくにはどうすればよいだろうか。	田中助教

本セミナーは教育目的に限定して設計されているため、その実施にあたっては、受講対象となる新任教員を、「平成26年度の本セミナー実施以降、本学に採用されて、正規科目を担当している者」と定義した上で、教育推進・学生支援部教務企画課経由で、各部局に対して参加依頼の通知を行いました。当日の参加者は68名（内訳：教授8、准教授15、講師6、助教39）でした。

参加者に対して、セミナーに対する意見・感想を問う事後アンケートを行った結果、50名から回答が得られました。まず、セミナーの開催時期については、適切であったという評価が46%、適切ではなかったという評価が10%、どちらともいえないという評価が14%でした（無回答16%）。開催時期が適切であった理由として、「本学の教育環境になれ、その問題も見えてきた」、「夏休みの時期で比較的時間がとりやすい」などの意見があげられました。他方、適切ではない理由として、「講義が開始される前に実施される方がよい」、「後期開始直前の、忙しい時期の開催だった」などの意見も寄せられました。

本セミナーの改善すべき点については、「1日に集中的に開催されているため、情報量が多い」、「ミニ講義において質疑応答の時間が十分に確保されていない」、「グループ討論に一つしか参加できないのはもったいない」といった意見があげられました。

本セミナーに参加してよかった点については、ほとんどの回答用紙にコメントが記載されていました。本プログラム全体の総合評価は、5段階評価の4.21と高いものでしたが、それを裏付ける具体的な回答が得られました。そのなかには、「参加者の間で様々な悩みや問題意識を共有することができた」、「授業の準備やトラブルへの対処など、実践的な内容を聞くことができた」、「京大の現状の理解に役立った」、「部局をまたぐ情報交換があった」といった声も聞かれました。

今後はこれらの意見を参考に、テーマを絞って短時間で継続的に実施する可能性も含め、新任教員へのさらに効果的なサポートが検討される予定です。



教育制度改革に関する勉強会

大学院カリキュラムの可視化と科目ナンバリング制度

京都大学では現在、全学の教育制度委員会の下で、GPAや科目ナンバリング制度の導入、カリキュラムの体系化などの教育制度改革が進んでいます。FD研究検討委員会ではこれまで、高等教育研究開発推進センターや教育推進・学生支援部教務企画課との連携のもと、それぞれの改革についての勉強会を開催し、要請のあった部局に対してコンサルテーションを行うなど、各種の教育制度改革の支援を行ってきました。昨年度の学部コースツリー勉強会に引き続き今年度は、大学院カリキュラムの可視化と科目ナンバリング制度に関わる勉強会が開催されました。

1. 大学院カリキュラムの可視化

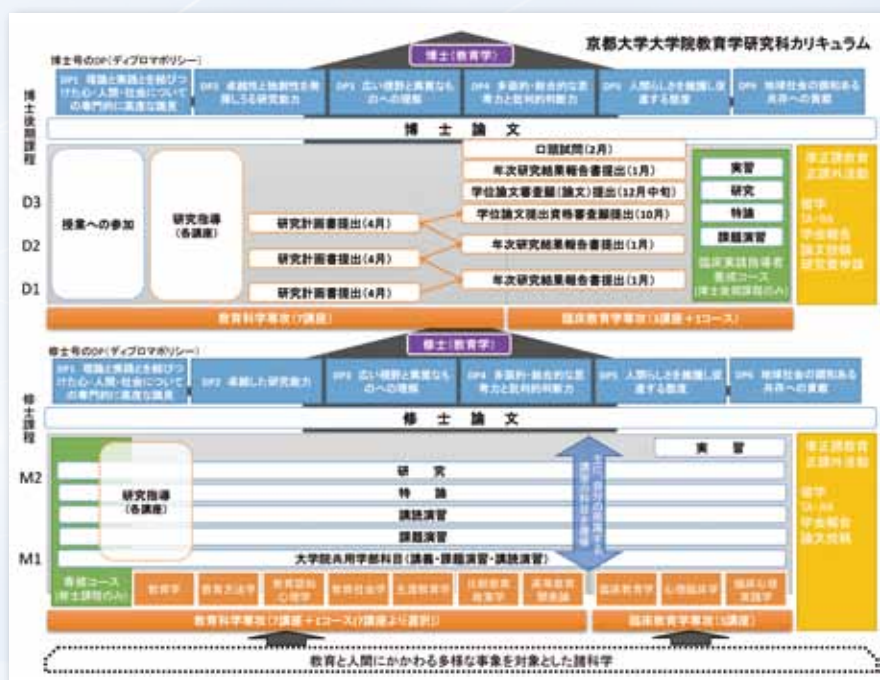
昨年度の学部コースツリーに続いて、今年度は大学院カリキュラムの可視化に取り組みました。大学院、とりわけ博士後期課程では、コースワークよりリサーチワークがカリキュラムのなかでより重要となるため、「コースツリー」という表現は使わず、「カリキュラムの可視化」と呼んでいます。コース（授業科目）間の関係をツリー形式で示すことは求められませんが、正課の授業科目だけでなく、学位取得に関連する研究指導や準正課プログラム（単位は付与されないが、ディプロマ・ポリシーとして掲げた知識・能力を育成する上で重要な、教育的意図を持った取組）なども示す必要があり、コースツリー作成以上に作業が複雑になることが予想されました。

そこで、7月29日に「大学院カリキュラムの可視化」勉強会が開催されました（主催：教育制度委員会WG2、共催：FD研究検討委員会）。参加者数は57名（教員38名、職員19名）でした。この勉強会の目的は、学部コースツリーとの共通点・相違点をふまえ、大学院カリキュラムの可視化の意味、目的と効果、記載が望ましい項目・内容、作成手順などを示すことにありました。第1部では、本学のデザイン学大学院連携プログラムなどの事例を取り上げながら、作成上の留意点に関して説明が行われ、第2部では、関連する部局ごとにワークショップ形式の相談会が開かれました。事後アンケートの結果は、「非常に有意義であった」（41%）、「まあまあ有意義であった」（54%）（n=46）と、過去2回の勉強会を上回る高評価でした。

この勉強会の内容や資料は、FD研究検討委員会のHPに掲載されています。

「大学院カリキュラムの可視化」勉強会（通算第13回）<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/session/post13.php>

なお、「大学院カリキュラムの可視化」の図は、2016年4月には公開され、オリエンテーションや大学院説明会などで活用される予定です。



教育学研究科のカリキュラム（暫定版）

2. 科目ナンバリング制度

大学における教育課程の体系化方策の1つとして、科目ナンバリング制度があります。2012年8月に出された中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）』の中で、以下のように紹介されています。

…科目を履修する学生をはじめ、当該大学、学部、学科等が提供している教育課程の内容に関心を持つ全ての人に教育課程の体系が容易に理解できるように、科目間の関連や科目内容の難易を表現する番号をつける（ナンバリング）など、教育課程の構造を分かりやすく明示する工夫が必要である。

科目ナンバリングは、大学教育の国際通用性を高める手段の1つでもあることから、2014年度から開始された「スーパースーパーグローバル大学創成支援事業」（通称、SGU）の要件として組み込まれています。本学もタイプA（トップ型）で採択されています（事業名「京都大学ジャパングートウェイ構想」）。

こうした流れも受け、本学では2013年12月以降、教育制度委員会およびそこに設置されたWG2において、科目ナンバリング制度について全学的な導入に向けた検討を行っています。この検討と併せて進行していた上述の学部コースツリー（2014年度）、大学院カリキュラムの可視化（2015年度）は、カリキュラムを学年進行に沿って配置し、最終的にディプロマ・ポリシーへ到達する経路を図示するものであり、科目ナンバリングとも関連性が強いものです。

この制度検討への支援の1つとして、2015年3月6日（金曜日）10:30～12:00、附属図書館4階大会議室にて、教育制度委員会WG2の主催により、「勉強会」において講演および質疑応答が行われました。

これに加えて、WGにおける報告もありました。年度が変わり、委員の交替もあったことから、10月20日開催のWGにおいて「コース・ナンバリングの意義と活用方法～Mobility, Accessibility, & Quality Enhancement～」と題した報告ならびに質疑応答が行われました。

ここでは改めて、ナンバリングの意義・目的・対象・期待される効果・国内外の活用事例・課題などが紹介され、本学における具体的なナンバリングのルールを検討する土台固めを目的に議論が行われました。グローバル・スタンダード、ナショナル・スタンダードが明確に定められていない中で、ローカル・スタンダードを作成することによる弊害（ガラパゴス化してしまうのではないかと、再度検討する必要が生じ非効率ではないかなど）も話題に上りましたが、最終的には「何のためのナンバリングなのか」という点について共通理解を得ていく方向で議論が行われました。

大学院カリキュラムの可視化が一段落した現在、WGでは引き続き本制度の導入に向けた検討が行われています。最終的な形が提示される段階ではありませんが、この議論の過程を通じて、継続的に情報提供等の支援が行われています。



ナンバリングの意義と活用方法

◆学習者(在学生)

1. 多様な授業科目から適切な選択履修に基づく学修を促す（他学部生含む）
2. 学生の到達度（GPAや単位取得数等）に応じた学修支援

◆学習者(進学・留学希望者)

3. 他大学、海外との単位互換を保証（JDやDD等）
4. 難易度・位置づけが明確になることで、編入学や単位認定もしやすくなり、教育の国際化の促進

◆教員・大学

5. カリキュラムを可視化し、学位取得までの工程を明示
6. 組織的な観点からカリキュラム設計や授業内容を検討



FD研究検討委員会概要

FD研究検討委員会は、本学の教育担当理事、各部局から選出された教員、高等教育研究開発推進センター所属の教員に事務部代表を含む30名程度の委員から成ります。この委員会と高等教育研究開発推進センターが協力して、必要に応じて検討課題に対応したプロジェクトチームを立ち上げ、FD活動推進への取り組みを行っています。

主な活動

- FD関連情報の共有化と公開
- 各種FD関連情報の収集と提供
- 全学教育シンポジウム
- プレFD
 - ・大学院生のための教育実践講座
 - ・文学研究科プレFDプロジェクト
- 新任教員教育セミナー
- 部局FD活動ワークショップ・研修会等への連携・支援
- 勉強会

※他にも、高等教育研究開発推進センターが企画・実施してきた公開授業・検討会を、2008（平成20）年度からFD研究検討委員会の主催事業として年1～4回開催しており、全学的な参加を呼びかけています。

2016年3月 京都大学FD研究検討委員会発行

京都大学のFDに関する取り組みについては、

FD研究検討委員会のホームページ

<http://www.fd.kyoto-u.ac.jp/> をご覧ください。

公開授業・検討会を企画される場合は、

教育推進・学生支援部教務企画課（電話075-753-2548）までご連絡ください。



京都大学のFD

2015

Mutual Faculty Development

